



れでいいんだ。若者にアピールすればいいので、あなたに売れなくても」。



しかし、そうだろうか。表面的にコトバの羅列を覚えて何の役に立つのか。試験に通るためには、訳が分からないまま暗記をする。そういう学習法を求めているのか。ごとき教科書が情報分野でもよく売れるのである。学力は落ちていない、あるいは、落ちていても問題ない！と強弁する人もいるらしい。読解力は恐るべき貧困さで、長文は（英語でなく）日本語でも読めない。語彙も乏しいが、だからといって辞書をひくことはしない。



これに対する筆者のささやかな抵抗を述べたい。分厚い教科書を選択する方法も考えられる。しかし、それはやめた。学生に反発されては元も子もない。まず、教材はすべて自作する。配布プリントはできるだけ全体像が見渡せるような簡潔な記述を目指す。図解もできる限り使う。英語も含めできるだけルビを振る。重要語句はゴシックにする。ここまでは薄い教科書と同じ戦略である！しかし、語句の説明は必ず付け、多数の小問を埋め込んであるのが違うだろう。その小問にぶつかることで、分かった気で次に進もうとしたところでも、そうはいかないと気付く。Webに上げた補助教材には、解答の解説を書いている。まずは解答のヒントや考え方を示し、答えは後に書く。答えの後には、別法や、結果の意味、実際の設計での意義など関連事項を、○で始める項目に分けて書く。後ろほど砕けたユーモアのにじみ出る書き方にしたい（これは修行不足でまだ願望どまり）。それぞれの項目は短い。次々読み進ませて、知らぬまに長文を読ませるのである。結果的には学生はその多数の問題を解く、あるいは、解答だけ見ようとして、補助教材で多くの文章を読み、関連した事項とのつながりを付け、多方面から見るようになる。これは開学2年半で、ほとんどがまだ1回しか使っていないので、評価できる段階ではない。このような作り方・書き方でなく、コンテンツ自体がもちろん重要であり、かなり独特のものを開発しているが、その説明をするにはこのコラムではあまりにスペースが少なすぎる。はたして、ムダな抵抗をやめて「ご時世」と降参すべきか。

（平成 15 年 12 月 26 日受付）

情報技術の教科書

都倉 信樹

（鳥取環境大学）

n-tokura@kankyo-u.ac.jp

今回は情報技術関連の教科書・参考書を取り上げた。書店には派手な表紙の、既成のソフトウェアの扱い方（理屈抜きにどうクリックするかだけの「運転法」）の本が圧倒的に優勢で、情報技術の基本を扱った本はほとんど見かけない。やはり基礎基本をしっかり学ばないとよいものは作れないと旧式人間は考える。しかし、唯一解を求めること、ハウツウ追求を刷り込まれた学生は、回りくどいのはいやがる。これに迎合するのか、あきらめたのか、難しい理論などはやめてしまおうという考えも聞く。これで日本の将来の情報技術は優位を保てるのだろうか。当然、否というべきであろう。



出版社は分厚い本は売れないという。薄くて、文章が少なく、図解が多いとさらによいというから、内容はますます薄くなる。ご丁寧にも、キーワードは太字にしてある。学生は手を動かす必要はない。できるだけ、読者に頭や手を使わせないように工夫しているかに見える。ここで白状すると、著者のような石頭にはこの種の教科書はどうにも分からない。昔の受験日本史のように単にコトバを羅列し、説明のほとんどないのと似ていて、論理的に理解できないからである。しかし、学生はコミックのようにぱっと眺めて直感的にとらえるのが苦にはしない。若者は漫画をすさまじいスピードで見ているが、著者はとてもそのスピードでは無理で漫画も隅々まで見ていて笑われる。石頭だから図解もよく見る。すると、それぞれの線や囲みがどういう意味なのかが気になる。点検すると、あまりにも曖昧で、いい加減に書いた図が多くて、もうついていけない。著者は言うだろう。「そ

